

# 敦煌変文の素材と日本文学

——楚滅漢興王陵変・蘇武李陵執別詞とわが戦記文学——

川 口 久 雄

## 一

源氏物語に中国の故事をひきあいに出して、

もろこしにもわがみかどにも世にすぐれなにごとも人にことになりぬる人のかならずあることなり（須磨巻）

ひじりのみかどの世にもよこさまなるみだれいでくることもろこしにも侍りける、我國にもさん侍る（薄雲巻）

のごとく中国と日本のことをひきくらべる叙述のところがすくない。河海抄の著者はこれらに対して、

漢家本朝其例多存

和漢の縁起一同也

などといい、和漢古今の先蹤というものを叙述の背景にしていることを指摘し、異朝例に対して本朝例、唐書例に対して和語例をあげている。

この傾向が増大して、話の間に中国説話が独立的に挿入されてくるのは軍記物の一つの特徴である。源氏ではさりげなく本文のなか

に三史・文選および文集などの故事がとけこんでのべられるのであるが、平家物語などになると、

遠く異朝をとぶらふに……近く本朝をうかがふに

（流布本巻一、祇園精舎）

昔、晉文信勃鞞之言、以奮威懾齊桓用管仲之計以匡天下セリキ、今頼朝与時政合躰同心シテ……

（延慶本巻二、佐々木者共佐殿ノ許へ参事）

のごとく、明らかに並列して出し、さらに「蘇武」（巻二）とか「咸陽宮」（巻五）のごとく、独立の一章として中国説話が挿入されるようになる。これはわが口がたりの文芸において、わが国のことを語りだすまぐらとして、あるいはむすびとして中国古典の典拠・先例をもちだして、「これにつけても本文あり」として、よりどころを漢文古典に求めるといった一つの伝統的な態度のあらわれである。

これは一方では異国の説話のおもしろさに目を耀やかした当年の民衆の素朴な精神をも反映するものであるが、いま語り物文芸の一

たる軍記物における漢の王陵と蘇武・李陵の故事をとりあげて、それらがわが文芸としていかなる役割をもつかを考えてみたい。しかも中国の語り物たる敦煌変文のなかに奇しくもこの両故事を主題とするものがあり、最近周紹良氏によつて学界に報告されたので、これらとの対比において説話の成長と変容のすがたを追求してみたいと思うのである。

## 二

王陵のことは史記高祖本紀などに散見するが、前漢書四十、列伝第十に詳しい。当面必要な話の筋をあげると、

①王陵は沛の人だ。高祖が僣賤のときはこれに兄事した。高祖が沛に兵をあげ咸陽に入るや、陵は党数千人をあつめて南陽に居て高祖に従わず、洞ヶ峠をきめこんで形勢を觀望していた。②漢の高祖が項籍を攻撃する時になつて漸く漢軍に従つた。そこで楚王項羽は怒つて、陵の母を捕えて陣中においた。陵の軍使がきた時、陵の母を殺しそうな様子を示して、陵を自軍に招き寄せようとした。陵の母はこつそりその使者を見送つて、泣いていうには、陵に告げよ、よく漢王に事えよ、漢王は長者である、私のために二心を懷くなかれといつて、使者の前で劍に伏して死んだ。③項羽は怒つてその母を烹た。陵はついに漢王に従つて天下を定めた。というのである。この故事は一種の烈婦子をはげます型の話で、孟子の母が子のために三遷した故事とならべて、蒙求などには「陵母伏劍、軻親斷機」と対して、ひろく口誦せられ、孟母斷機図と共に昔から中国人好みの図柄として絵にもかかれたであろう。

さて王陵変文には

- (1) 王陵変文殘卷 (Pelliot. 3527-a.)
- (2) 王陵変文殘卷 (P. 3567)
- (3) 王陵変文殘卷 (P. 3527-b.)
- (4) 漢將王陵変 (Stein. 5327)

が知られていたが、前三者について王重民氏が研究し、国立北平圖書館刊第十卷第六号 (1936) に収録されたが、その二年後に出た鄭振鐸氏の中国俗文学史にも記載がない。昨年十二月刊行された羣録に(1)(2)(3)が一聯のものとして一まとめにしてその奥題により「漢八年楚滅漢興王陵変」と題されて翻刻された。本年二月に出た那波博士の「変文の演出」(略称)および本年七月に出た梅津次郎氏の「変と変文」に書名が引用されたが、わが国でまとまつた研究はまだ出ていない。巻首欠、三分された袖珍胡蝶装、奥に

漢八年楚滅漢興王陵変一鋪

天福四年八月十六日孔目官闔物成写記

と識される。鋪とは掛幅一掛の意であつて、これには図が伴うものであつたことは那波・梅津両氏の御説のとおりであり、天福四年は五代の年号、わが朱雀天皇天慶二年 (990) にあたる、土佐日記が書かれて四年目。本変文はその文章からみても正しく絵があつたことをうかがえるのであつて、散文の話が一段落して、韻文でその筋を繰返すところの境目に「……処」というきまり文句が出てきて、その次に「而為転説」「謹為陳説」「若為陳説」というような、「さて転つておきかせ申さうぞ」という意味のきまり文句が出てくることによつて、Pelliot 本面卷降魔変、Stein 本目連救母変文と同軌であり、正しく図を伴つたものであることが証擧だてられる、殊

に巻首の部分に「二將辞王、便往砍營処一鋪、便是処初」という文句は王昭君妾の「上卷立鋪畢、此入下卷」の文句と共に注目すべきである。さて現存本の限りでは八段落あつて、ほど同数の絵の場面を伴うものであらうと想像される。話の筋を摘記すればこうである。

①漢將王陵・灌嬰の二人は王より弓箭を賜わり楚營にきりこみにいでたつところ。二將のうた、いざや今夜項羽の首を斬つて我が王に献らん。②二將は楚軍の前衛を突破して楚營に忍びこむ。項羽は三更不安を覺えて当直季布をよんで巡察せしめる。王陵は幕下の兵を血まつりにあげ、二將楚營に斬りこみのところ。うた、灌嬰鼓応して縦横に斬り、退散数里、後方に楚軍同志の斬り合いの声をきく。③楚の前衛の二將、水道を切つて官道を不通にする。王陵はいつわつて楚王の勅使といい、敵が下馬するすきにその線を脱出、背射して楚兵を殺す。④項羽四更に鍾離末を呼んで同志いくさのため五万人死し、前衛にても五十人が射殺されたことを知る。王陵・灌嬰のしわざだと知つて、鍾離末の策により、王陵の住、綏州茶城村に兵を遣わす。鍾、三百騎を率いて陵の莊を包圍する。王陵の妻、田にあつて兵馬をみて母に告ぐところ。うた、母は陵のきりこみを知つて微笑して、却つて項羽の無道を罵る。⑤鍾離末は王陵の母を捕え、枷して楚に帰る、項羽自ら武裝して陵に手紙をかけと母をせめるところ。うた、陵の母は却つて王を罵つて、王陵を手紙で招くことを肯んじない。⑥楚王激怒して拷問を加える。母は天を仰いで子の名を叫び、楚兵みな腸を断つところ。うた、ひとえに高祖に仕えて心を移さざれ。⑦漢の高祖、張良の言により賢人盧縮を軍使とし

て楚營に遣わす。陵の母いつわつて子を招く手紙を書こうといい、王の劔を得たしといい、劔をえて自刎して死するところ。うた、王陵国境にてこれをきいて誓つて鍾離末を斬らんとなげく。⑧盧縮の復命をきき、漢王は張良に詔し、三百の將、四十万の兵を集めて、陵の母に一国太夫人の位を賜り大いにその霊をまつる。陵の母は楚營の中より一朶の黒雲に乗り、空中より姿をあらわし、漢王に謝するところ。うた、王陵のくどき、母よ、憂え給うなかれ、必ず万戸侯に拜せられん——以上である。黒雲に乗じて亡き王陵の母の霊が出現する神変のクライマックスはいかにも変文らしいところであるが、同時に亡霊の魂まつりの儀礼描写で変文を結ぶところは昭君妾と軌を一にするところ。かつ韻文の直前「……之処」とある叙述がいかに具体的である、例えば、

陵左手攬髮、右手抬刀、頭隨刃落、含血洒流四方、二將□（砍カ）營処、謹為陳說。

——王陵弓手に髪をかいつかみ、馬手に刀をとりあげて、はらりと頭を斬り落す、血潮は四方にぞ流れける。ここぞ二將が敵陣に斬りこみするところ。いざ謹んで語りまいらせん。

新婦檢校田苗、見其兵馬、歎快堂前、説其本情処、若為陳說。

——折しも王陵の北の台、田植田をみめぐりにありしに、時ならぬ兵馬をみて、袂をかいこみ馳せ帰り、母者にいそぎ告ぐところ。いざや語り申さむきこしめせ。

とあつて、私にはその場面を描いた図柄を直接に説明する具体性に富んだ行文のように思われるのである。これらはいかに荒事の境界、修羅物の世界であり、王陵の母の伝記を中心とするようでもあ

るが、前半のごときは全く夜討の闘闘描写であつて、いかにも総説きの講釈の形において一種のいくさがたりの口誦文芸の成立することを思わせる。吉川教授は唐の末年に三国志の原型になるような一種の軍談がすでに発生して、李商隱の作品などに影を投じているらしいと考えられておられるが、このことを裏づけるように思われるのである。

### 三

王陵の母が子をはげますために楚宮にて死ぬ物語はわが今昔物語集にはみえず、宝物集にはじめてそれらしい投影をみる。

又漢高祖ト楚ノ項羽ト戦シ時、高祖ノ方ニ石奢ト云兵アリ。項羽石奢ガ母ヲ取籠テ、汝ガ子石奢ヲ呼寄ズバ、命ヲ断ベシト云ケルニ、石奢ガ母、項羽ハ天下ヲ保ツベカラズ、軍ヲシテ必ズ漢王ニ仕奉レ、我ハ命ヲ捨ゾト、我子ノ石奢ガ許云ヤリテ、劍ニ落懸リテ死ス。サレバ心地観經ニハ、世人為子造諸罪、墮在三途長受苦トハ説タリ。実ニ人ノ親ノ子ヲ思フ志、浅カラズゾ特ルメル。

(七卷本卷五、第六業障ヲ懺悔ス、付石奢ガ母ノ事)  
この石奢はまさしく王陵のこと、おそらく王陵の草体から転々して写し誤つたものか、三卷本の平仮名古活字本はさらにこれを石大者と誤つてゐる。これは蒙求の注文あたりを源とする説話であらうか。

次に平治物語の高橋貞一氏のいわゆる乙類系杉原本と丙類系流布本の巻中「悪源太頼政と戦の事付漢ノ王陵ガ事」の条に王陵のことが見える。しかし甲類系の古本にはこの条がないから、古本の成立

したと思われる鎌倉初期にはこの話は添加されていなかった。太平記の諸本には巻十に、「安東昌賢自害事付漢ノ王陵ガ事」としてみえている。

さて平治物語では悪源太義朝が六波羅の清盛攻撃の条、一門の源頼政が六条河原に控えて、源氏が勝たば内裏へ参らん、平家勝たば六波羅へ参らんという構えをみてとつて、若氣にはやつて頼政の軍をいきなり攻めてこれを敵に廻してしまふくだりに、王陵のことをひきあいに出している。すなわち勝負を両端にうかがう頼政を王陵に比し、いきなりこれを攻撃して敵に廻してしまふ智慮なき猛將として義朝を項羽になぞらえたのである。だから王陵の母のことは主題の中心とはならない。

これに対して太平記では新田義貞が鎌倉の北条高時攻撃の条、鎌倉方の安東入道三千騎はうち敗られて百騎となつた時、義貞の妻は安東入道が自分の伯父であつたので、義貞の降伏勧告状に自分の手紙をそえて軍使を遣わす。入道は恥を知り義を重んずる鎌倉武士、武士の妻にも似ぬ降伏勧告命乞いを保証する姪の手紙に怒つて使の前にて自害する、その時の文句に王陵の母は女ながらも義のため子孫のために死んだことを引きあいに出して、いかにも王陵説話の中心的主題に触れている。西源院本をはじめ古本系ではいづれもこの説話を保有している。伍子胥説話の場合でも同じことがいえるのであるが、おそらく太平記が書かれた後において、古本平治物語のなかに、この太平記の王陵説話に暗示をえて、新しくこれを書き加えたのが杉原本・流布本平治物語ではなからうか。いま流布本ならざる古写本の本文によつてこの両者の叙述を比較してみよう。

## 平治物語卷中漢の王陵が事

さても頼政は、あながちに義朝に敵せんとは思はざりしを、悪源太にかけたてられて、このむ所のさいわひと、六はらへこそ参りけれ。悪源太のわかげのいたす処なり。頼政勝負を兩たんにうかゞふといへども、平家にあふてこそ死たけれ。詮なきどしいくさにあたらず兵どもをうたせられけるこそむねなれ。

漢の高祖と楚の項羽と国をあらそふ事八か年、たゞかひをなす事七十二度、まいど項羽かつにのるといへども政道みだりがはしきゆへに、民ふくせず、高祖はたゞかひつねによはしといへども、撫民の徳あるがゆへに、人は是になつく。こゝに王陵といふ者あり、城をかまへ兵をあつめながら、両方のせうぶをうかゞひ、楚にもくみせず、漢にもてきせずして、あひさゝへたり。名将なれば、項羽しきりにめすといへども、虞氏の行跡をかへりみてまいらず、よつて兵をつかはして是をせむるに、城かたくしてさらにおちず。かへつておほくのみかたの勢を損ず、楚王おほきにいかつてはかりごとをめぐらして、その母をとらへたてのおもてに引はりてよせたらんに、王陵は孝行第一の者なれば、さだめて弓をひくにあたはずして、かならず降をこはんか、しからばその身をいけどりて、頸をはねよと議せられけり。母これをもれ聞まことに王陵はぶさうの孝子なり、我楯のおもてにふさば、かならず楚にくだらんと思ふべしと、ひそかに使をつかはして此よしをつけて、天下はつめに漢王にふくすべし、汝かならず高祖の臣となるべし、あへて楚にくだる事なかれ、よつて我死をかるくすとて、すなはち

## 太平記卷十漢ノ王陵ガ事

昌賢大ニ気色ヲ損ジテ申シケルハ、梶檀ノ林ニ入物ハ染メザルニ衣自香シト云ヘリ、武士ノ女房トナル者ハ、ケナゲナル心ヲ一モチテコソ其家ヲモツカサドリ、子孫ノ名ヲモアラハス事ナレ、サレバ昔漢高祖ト楚ノ項羽ト国ヲ争テ戦ヒケル時、漢ノ兵ニ王陵ト云者、城ヲ構テ楯籠レリ、楚是ヲ怒テ兵ヲ発シテ責ルニ、城更ニ落チズ、此時楚ノ兵相謀テ曰、王陵ハ母ノ為ニ忠孝ヲ存ズル事不淺、所詮王陵ガ母ヲトラヘテ、楯ノ面ニアテ城ヲ攻ル程ナラバ、王陵矢ヲ射事ヲ得ズシテ降人ニ出事アルベシトテ、潜ニ王陵ガ母ヲゾ捕ヘケル、彼ノ母心ノ中ニ思ケルハ、王陵我ニ仕事大難曾參ガ高孝ニモ過タリ、我若シ楯ノ面ニ張ラレテ城ニ向程ナラバ、王陵定テ其悲ニ堪ヘズシテ、城ヲ落サル、コトアルベシ、不レ如イク程ナキ命ヲ子孫ノ為ニ捨シニハト替ニ思定テ、自劔ノ上ニ死テコソ、遂ニ王陵ガ名ヲバ揚ゲタリシカ、

我只今マデ武恩ニ浴シテ人ニシラル、身トナレリ、今事ノ急ナルニ臨デ降人ニ出タラバ、人豈恥ヲ知タル物ト思ハシヤ、北ノ臺女性ノ心ニテカヤウノ事ヲ云ル、トモ、新田殿ハサル事ヤアルベキト制セラルベシ、新田殿縦敵ノ志ヲ奪フ為ニ、自然又宜フ共、北ノ方ハ我方様ノ名ヲ失ハジト思ハルベシ、似ルヲ友ノウタテサ、子孫ノ為ニ憑レズト一タビハ泣テ、彼使ノ見ル前ニテ、其文ヲ刀ニ拵リ加ヘテ、腹カキ切テ臥ニケリ。(古写本)

劍にふしてむなしくなりき。かるがゆへに王陵あながちに項羽にうらみふかきがゆへに、たちまちに高祖の臣となり、身命をかりんじつゐに楚をせめかたぶけり。

悪源太も義をもつて和したらば、頼政も名将なり、いかでか見捨さるべき。我武略の達せるまゝに、うたばたちまちにくだり、せめばかならず伏せんと思ふがゆへに、人のふぎをとつて我身のあだとし給へり。たとひ勇力ありといふとも、人和することなくば、つゐにかつことえがたしとぞみえける。(彰考館藏杉原本)

平治物語は叙述が詳しいようであるが、肝腎のところの焦点がぼやけており、太平記の方が簡潔ながらかえつて話の筋をよくとらえている。すなわち、太平記では①王陵の母をとらえることは臣下が献策したことになつてゐる点は変文と一致し、②王陵の母を楚軍が捕えてゐる点は漢書と一致するのに対して、平治物語では①は楚王と臣下と議したことになつており、②は王陵の母が捕えられないで自宅であつたことをもれきいて死ぬことになつてゐる。平治物語の諸本のうちで古本系と流布本系の中間に立つ杉原本は、当然流布本よりも古い形を示すのであつて、流布本の叙述が一層これよりも詳しくなつてゐることを思へば、だいたいにおいて語り物においては叙述が詳しくことごとしくなるほど時代的に後のものであり、増補されたものであると考えていい場合が多いようである。

さて王陵変文とわが軍記物の王陵の説話とは相互に直接の関係はたずぬるによしなく、またたずねても何の関係もないであらう。たと王陵の母の悲話が同じ漢書の列伝から源を発して、一方は五代

動乱の中国社会において漢楚軍談の一原型か一支脈として絵解きの辻講釈あたりでかつかりかつうたわれもしていたと考えられるとき、他方それより約四世紀を経てわが吉野朝前後の内乱の社会において琵琶法師や太平記読みによつてはげしいいきさがたりの挿話として語られていたという事実は興味ぶかい。

#### 四

李陵のことは史記の李將軍列伝にみえ、漢書の武帝紀にみえるが、漢書卷五十四李広伝に見えるのが詳しい。当面必要な筋をぬきかきすると、李陵は名将李広の孫、騎射を善くし人となり謙譲。騎都尉となつて酒泉・張掖で五千の兵を練つていた、天漢二年貳師將軍三万騎をもつて酒泉より出撃、天山の匈奴攻略の時、李陵を輜重の役に当てんとした。李陵は進んで武帝に願出で一隊を率いて貳師の軍のため匈奴を牽制したいとして許されて進發した。居延に駐屯していた漢將路博徳が、天子より協力を命ぜられたにもかかわらず、この

若い後輩の後塵に立つをいさぎよしとせず、勝手に策動したために、李陵は歩卒五千で無謀にも孤軍匈奴の本拠に長驅遠征を余儀なくされた。果して単于是騎兵三万をもつてこれを邀撃、五千の精兵は李陵の命を守つて奮戦十数日、胡兵の首万余級を斬つた。単于是あまりの手ごわさに明日は引き返そうと思ふとき、斥候管敢が自分の手落ちを上官から叱られたのを恨んで敵に降り、漢軍に伏兵なく弓矢も盡きたことを教える。最後の強襲に逃れたもの四百、ついに李陵は捕えられる。李陵は機をみて再び漢帝の恩に報いんと期していたところが、武帝は佞臣の言をいれ、司馬遷の辨護に対して、かえつてこれを腐刑に処して、ついにその母弟妻子一族を誅してしまつた。これは李緒という漢将がさきに降伏し、匈奴の軍事指導をして漢軍を破つていたのを、李陵のしわざと誤り伝えられたためであつた。李陵はこれをきくや李緒を刺殺し、それより単子の女と婚して漢の武帝の死後、昭帝の使より帰国を勧められても帰らず、匈奴にあること二十年にして異域の鬼となつた。

さて蘇武の伝は同じく漢書五十四蘇建伝に見える。蘇建の子武、字は子卿、李陵遠征の前年、抑留者交換の和平使節の団長として匈奴に使した。ところが匈奴に内乱があつて、副使張勝がこれに関係したのに坐して遂に捕えられる。降服をすすめられてきかず、自ら胸を刺す。胡医が独特の傷の手当をして助ける。手段を盡して降伏帰化を勧めるが、ついに誘惑されず、武を穀物の穴倉に幽閉して飲食を与えなかつた。武は雪と旃毛をかじつて死ななかつた。ついに武を北海（バイカル湖）のほとり無人の野に送つて羊を牧せしめ、牡羊が産をしたら帰えさうといつた。単子の弟王が狩の時武をみて衣

食を給した。李陵は胡中に入つてからも旧知の蘇武のことを口に出さなかつたが、久しくして、陵はバイカルに遣わされた。酒と音楽をもつて武をねぎらい、武の妻が再嫁し兩女一男死生もわからぬから、いい加減にあきらめるように勧めるが、肯んじない。昭帝即位して匈奴と和親を結ぶや、漢使来つて武を求める。単子はいつわつて武が死んだという、使者は降伏した使節団の一員に教えられて、漢帝雁書をえて武の健在を知ることをつわり伝えてせめた。李陵は酒をくんで悲痛の別れを告げる。かくて蘇武は帰国して典属国を拜し、年八十で死ぬと麒麟閣にその像をかざられた。

善注文選卷四十一に答蘇武書一首李少卿作がみえ、骨肉刑を受け、帰るに処なきを訴えて、帰国をうながす武の友情を断わる手紙がある。これは道具だてがあまりに揃つていて、後人の作かとも疑わせるが、これとならぶ司馬遷の報任少卿書は疑うことができないようである。

ああ、子卿よ。それまた何をか言わん。相去ること万里、人絶え路殊に、生きては別世の人となり、死しては異域の鬼たらん。といつて別れを告げる悲痛の文字は人の肺腑をえぐる。李陵こそ中国古典における悲劇の人間の典型である。

さて Pelliot. 355号敦煌写本に「蘇武李陵執別詞」一卷、全部三十六行、首尾完全の一資料がある。これは類本の存否はまだ報告されず、これについての研究もまだなされてはいないようである。すこぶる短篇であつて、いわば「蘇武李陵別れの段」といふべき語りものであつて、変文特有の音に当てた宛字を交じえ、不明誤脱もすくなくない写本である。たとえば浚稽山とあるべきを、峻溪山と書

くごときである。漢書の蘇武伝と文選の李陵書とを源流とし蒙求における「李陵初詩」や「蘇武持節」などの略頌の口誦などを背景に、蘇武が李陵と朔北大漠のたゞなかに置酒して永遠の生別を告げるといふ悲劇的モチーフが中国民衆の心のなかにそだてあげられて形を与えられた平俗な語りものであつて、唐末五代、ことに異族の浸入に悩みぬいた西陲の町や村で、ちようど王昭君変文が講釈されたように、よろこんで講唱されたのもあろうか。

①帰国の途につく大使蘇武、迎えに来た漢使韓曾、二人を見送る將軍李陵。涙ながらに山谷を過ぎ、辿りゆく別れの道行き。幾重の山脈、こごしき絶壁、東渤海に連なり、西雁門に続く無限の曠原。春も草生いず、夏もなお雪ふり、猿啼き鶴叫ぶ、ものさびしき荒野原。時にひゞく胡国の笛、影のごとき羊飼いの姿。

②蘇武は單于をみて怒る。李陵は蘇武が漢節を杖つくをみまもる。悲しみ恨み、泣きみ笑いみ、辿りつきしはとある路のほとり。三人相對して泣きつつぞ酌む別れの酒。別れの琴を按じつゝ、いざ唱わん。蘇武酒をとつて韓曾にいいけらく、我は大漢の將、久しく沙漠に沈みしに、思わずに迎えられ、帰らざらめやふるさに。言いつつ李陵を見れば、身にはえびすの裘、頭にかぶる胡地の帽。さてまた李陵に問うていう、將軍は大漢の將、ふるさとのそら隴西を、いかでか望まぬことやある。先祖以来の名門なるに、何とて沙漠を捨てたまわぬぞや。李陵はこれを聞くよりも、骨の碎くる思ひして、咎あるわれに、帰るべき家もなきを知り給はぬか。手もて胸をかきむしり、天を仰ぎて哭きいたり。

③李陵胡帽を沙漠に投げ棄て、腰間の刀を執りつゝ、長安の都に申

すがごとくという、昔歩卒五千に満たぬ小勢にて、敵地深く遠征し、單于の騎兵十万余と胸すく戦まじえたり。敵を斬り旗を奪うことに限りなく、匈奴をかけなびけしも、敵は枯野に火を放ち、炎のなかに包まれて、ついに詐り降りしに、何事ぞ、武帝妄臣の言を取り、わがいとけなき幼子や妻に何の咎やある、八十有五の母をさへ皆殺しにぞなし給う。ああ、われに帰らん心あらめやは、老母の塚の前にては、ねんごろにとふらい給えかし。武帝の殿の前にては、陵の心を訴え下されよ。旅人あらば言つてよ、雁の来らん時あらば、消息われに懸けて賜べ。

④この日、別れの酒を酌み、えびすの鼓うちたたき、別れの曲をぞ唱いける。蘇武は還らんとし再び李陵においすがり、馬もためらうに似たり。各詩一首を題す。

涼風趁煙□ □雁遠思辺  
蘇武帰南国 雖陵何負天  
美他失伴鳥 塞北□見蕃  
漢軍日雲下 咸陽路幾千  
蘇武これに和していわく、

勸君所賜酒 過後為君愁  
欲知相憶処 思君亶水頭  
有時無雁翼 羣臣並是憂

―空ゆく友の羨まし、群れを離れし鳥の身はとうたえば、雁の翼のあらまほし、君を愁えて待つものをと和して終る。右は荒筋を凡そ伝えるために摘要紹介したのであるが、これによつてどうやら①別離の道行、②別離の酒盛、③李陵のくどき(合戦と一族処刑との述



懷)、④ 袂別の詩詠の四段になつてゐることがわかる。白話的な散文であるが、①のごときは四字句からなつていて韻文への傾斜を示す。これは普通の玉陵愛や昭君愛のごとき、画卷を示すと思われる。「……之処」のきまり文句もなく、韻散交錯のスタイルでもない。むしろ終りの二首の李將軍と蘇大使の五言別離贈答唱和詩のための序のような体裁のようにみえる。また道行きからはじまり、くどきになるあたり文選の李陵の手紙の形式をも聯想させないでもない。変文の一種だとしても、果して蘇李袂別圖というような場面の絵解きの口がたりを筆録したものであるという証拠がない。どうかすると一曲の構成が影戲か木偶戲か村芝居の院本のような印象をさへ与えかねない。(わが謡曲の現在物の構成を聯想させないでもない。)

漢書では

於是李陵置酒、賀武曰(中略)異域之人、老別長絶(「陵起舞歌曰、  
「徑万里兮度沙幕、為君將兮奮匈奴、路窮絶兮矢刃摧、士衆滅兮  
名已隳、老母已死、雖欲報恩將安歸。」陵泣下數行、因与武決。  
とあつて、陵の舞歌——あるいは劍舞の歌謡などの伝承に出るもの  
でもあろうか。蒙求の徐子光補注によれば、また違つており、

陵以詩贈別曰、「携手上河梁、游子暮何之、徘徊路側、恨  
恨不得辭、晨風鳴北林、懽懽東南飛、浮雲日千里、安知我心悲。」  
武別陵詩曰、「雙鳬俱北飛、一鳬独南翔、子当留斯館、我当歸  
故鄉、一別如秦胡、会见何渠央、惓惓切中懷、不覺淚霑裳、願子  
長努力、言笑莫相忘。」五言詩蓋自此始。

とあつて、五言詩はこの時に始まるという伝説をしるす。袂別詞は  
要するにこれら詩を中心とする民間説話伝承の一つがしるしとどめ

られた語りものとみられるのである。

## 五

蘇武李陵説話がわが軍記物にいかに影響するかについて考えたい  
のであるが、順序として軍記物以前のわが文学にいかにあられる  
かについて略述したい。

古今集が撰進せられた延喜年間には大学北堂において前後二度漢  
書講義がなされているが、後度の竟宴に紀在昌は詩序を作り、詠史  
得蘇武の七言六韻を献つている。

三千里外行李に随い、十九年間転蓬に任す。賓雁に書を繫ぐれば  
秋葉落ち、牡羊に乳を期すれば歳華空し。

後の一聯は和漢朗詠に収められて愛誦せられた。雁書の記事を朗詠  
によむことは右のほか和漢共に多く、千載佳句、新撰朗詠等に見え  
るが一々あげない。たゞ古今集、秋上に、紀友則、

秋風にはつかりがねぞきこゆなるたがたまづさをかけてきつらん  
という明かに蘇武雁書をよんでいる作があり、これは是貞親王家歌  
合として紀友則集にも出るが寛平后宮歌合にも出ており、その後卅  
六人撰や和漢朗詠に収められ愛誦せられた。これら雁書をよんだ和  
歌は新古今・夫木・新後拾遺等にすくなくない。新撰万葉上、秋に  
右の歌に対して「書を繫け手に入る絨を開く処、錦字一行涙数行云  
々」という七絶がある。要するに九世紀後半寛平延喜前後蒙求・漢  
書が研究されたりして、雁書の記事も一般化したように思われる。

今昔物語集巻十、漢武帝蘇武遣胡塞語第三十に蘇武雁書の記事が  
出てくるが、説話特有の変容がみられ、決して漢書や蒙求注などを坐

右にして書き著わしたものでないことを示している。話の筋は①漢の武帝が蘇武を胡塞という所に遣わしたが久しくかえらなかつた。②衛律を使者として蘇武をたずね求めさせた。③その所の人はいつわつて武は死んだというが、偽りと知つて、方便をもつて雁が武の文を結付けて王城に飛んできたといつてせめた。④その所の人は隠しても無益とさとり武を衛律に会わせた、以上である。衛律は漢に帰化していた胡人、李陵と共に單于に降伏して胡の一王となつた人物で、蘇武に降伏を勧めたことが漢書に出ている、實際に漢使に對して雁書の事を告げよと知恵をつけた人物は常恵という人間であつて、ひどくあやまられて今昔に出てくるわけである。俊頼口伝卷上には前掲友則の歌の説明として今昔の筋と同じ説話をかかげている。(同じ和歌説話集であつても、範兼童蒙抄八、長流統歌林良材集下は筋がほぼ漢書によつていて正しい。)

源光行の蒙求倭歌卷三秋部、蘇武持節節の条に、

蘇武漢王の使として匈奴をせめに赴て忠節をつくす程に、かへりてゑびすに取籠られにけり。匈奴の王單于蘇武をおびやかしてしたがえんとするに、漢の節をうしなはずしてひざまづかず、猶劔をかざやかして賣れども、蘇武堂々として云、我漢の使也、ゑびすに隨にはござりきと答て、劔を取て自ヲ刺スに、匈奴大に驚て取はないて疵に葉をつけて助てけり。後深雪の中に籠てをきてけり。僅に雪ばかりをくひて命をいきけり。七日をすきて開て見に、蘇武つゝがなし。えびす蘇武を神なりと思ひなりぬ。北海の辺に出て羊をかはするに、漢の節を失はず、わづかにいけるに似たりといへども、牡羊に乳を期して歳花空くかさなりにけり。武帝

かくれ給て昭帝の世になりて、帝の使匈奴の国にいたりて蘇武をたづぬるに、はやく死にきと偽答へけり。いまだありとばかりをだに旧里の人にきかればやとおもふもかひなし。秋の空をむかへて都のかたへゆく雁の足に文をむすびつけてけり。雁南をさして飛去ぬ。帝上林苑にあそび給おりしも、賓雁書をかけていたれり。取て見給に蘇武さりてよりのこのかた十九年の愁を書つきたるなりけり。限なく哀とおぼしめして、慥に蘇武をたてまつるべき由せめられて、其時かへしたてまつりてけり。あまたの年を隔てければ、顔の色衰て頭白く成て、ありしにもあらずなりにける。

へだてこしみやこの秋にあはましやこしちのかりのしるべならずは

ずは

さても猶ふみかよふべき雲路かははつ雁がねのたよりならずは

(三手文庫本)

とある。雁書のことを実事としてあわれふかく物語にまゐて終りに二首の歌をよむ。この二首は漢故事和歌集、蘇武持節の条にも見え、そこには補注蒙求の注文が引用されている。

伝康頼自筆本宝物集、愛別離苦の条に、「アベ仲丸」の唐にて三笠の月をよんだ故事にならべて「蘇武之胡ニアリシ時、雁之足ニ文ヲツケタリトイフハカリコトシケルホドニ」とて匡衡の雁山の暮雲の摘句を引いている。しかるに六卷本宝物集卷二には

鬼界島ニ侍リケル比、未ダ生テ侍ル由ヲ風便ニ母ノ許ヘツカハストテ

薩摩ガタ沖ノ小島ニ我アリト親ニハ告ヨ八重ノ潮風

## 康頼入道性照

蘇武ガ胡国ニ罷テ、十九年マデ帰ラザリケンモ都ハ恋シク侍リケンカシ。漢王林苑ト云所ニテ遊給ヒケルニ、雁ノ首ニ文ヲ著テアリケルヲ見給ヒケレバ、蘇武ガコトツケ也ケリ、其時蘇武ハ未ダ生タリケルト思召テ召帰サレケル。雁書ノ事歌ニモ読侍リタリ。

(仏教金書本)

とて、友則の歌をもつてこの話を結んでいる。(ちなみに三巻本には康頼の歌の条のみ引いて蘇武の条は削られている)

なお十訓抄中巻に「蘇武は麒麟閣の功臣なり、塞垣にとらはれて十九年、つひに漢の節を失はず」とあつて、今昔に似るところがあり、注好選集上巻、蘇武鶴髪七十一の条に「此武者漢帝人也、為皇所使征胡塞、十六奉勅、卅四帰朝、即十九年転蓬、白如鶴髪乎」と見えている。

李陵の故事は蘇武に比して引かれることがすくない。蒙求和歌巻七旅部に李陵初詩として、

李陵漢王御使トシテ、胡国ヲセメニオモフキテ、五千ノツハモノヲシテ十万ノエビスニトリコメラレテ、トシヲヘニケリ。エビスノ王蘇ヲホドコシテツカハムトスレドモ、シタガハズシテ漢ノ節ヲオモヘリ。エビスイカリテユルサズ、ハルカニ故郷ヲヘダテ、タゞ異類ヲノミジミケル。時ニ蘇武スデニ宮コヘ返ルヨシヲキ、テ、蘇武ニ詩ヲオクレリ。(詩略) 五言詩コレヨリハジマレリ。

同ジエニムレキル鴨ノ哀ニモカヘル波路ヲトビオクレケル

(統類従本)

とあるが、すでに漢書や蒙求注文の筋よりやや変化してずれを示している。

## 六

蘇武・李陵の説話が平家物語流布本巻二鬼界ヶ島の流人卒都婆流しの条に出てくることは周知のところ。いま一方流系統本の古本たる熱田本を参考にし、八坂流系統本の古本に拠っている天草本を引いてみよう。

## 第九

康頼と少将とかの島で熊野詣での真似をし、また卒都婆を作つて流されたことを蘇武が雁書に引合はせて語る事

右馬之允、その島であつた事どもをもお語りあれ。

喜一檢校、畏まつた。

(少将と康頼と熊野詣でのまねをし、歌をかいだ卒都婆を流したところが、敵島に漂着して、都にもたらされ、清盛もみた条、本文略) 清盛も岩木でなければさすが哀れに思はれたと聞えてござる。清盛のあはれた上は、京中の上下、老いたも若いも鬼界が島の流人の歌というて口ずさまぬはござなかつたと申す。

さても千本まで作つた卒都婆やほどに、さこそは小さうあつたらうに、薩摩潟からはる／＼と都まで伝はつたことは不思議ぢや。余り思ふことは昔もこのやうな験のある故か。古へ漢王胡国を攻められた時、初めは李少卿と云ふ者を大將軍にして三十万騎向けられたが漢の軍は弱く、胡国の戦ひは強うて、官軍皆打滅され、あまつさへ大將軍李少卿まで生捕られた。

(天草本)

〔熱田本巻二、康頼入道千本卒都婆作事付蘇武之事〕

入道モ非ニ岩木ニ有□□哀宜入道相国慈上京中上下老  
 若鬼界鳴流人歌無不不曉將千本造卒都婆  
 成佐在小小自薩摩遠都伝不思議余容  
 ナレハカタアルニヤシノイニハケルニハシヘリキヨウワ  
 事斯在驗旧漢王被責胡国一輩李少卿大將軍  
 被向三十萬騎漢軍弱胡国戰強官軍皆被討滅  
 刺大將軍李少卿為胡王被虜

両本は同文であることがわかる、今天草本の筋をしるすと、①李陵に三十万を授けて胡国を攻めさせたが、李陵は生捕られた。②次に蘇武に五十万騎を授けたが、これもまけて六千人が生捕られた。③蘇武以下六百三十人の片足を斬つて放つた、蘇武だけは死なずに野山に露命をつないだ。④田に遊ぶ雁に文を結付けて放すと、昭帝御遊の空に飛び下つて、文をくい切つて落した。⑤帝は蘇武の生を知り、李広に百万騎を授けて胡を討ち、戦が勝つた時武が名のり出て帰国した。⑥片足をきられていたので、輿にのつて、十六の年から十九年ぶりに帰つた武は、肌につけていた帝下賜の旗を獻じ、賞として大国を賜わつた。

——唐土の蘇武は書を雁の翅につけて故郷へ送り、日本の康頼は浪のたよりに歌を故郷に伝えた。あれは唯一筆のすさみ、これは二首の歌、かれは上代、これは末代、胡国鬼界が島の境を隔て、世々かはれども、風情は同じ風情であつた。まことにふしぎなはかりごとでござる。(天草本)——と結ばれる。

しがるに熱田本・流布本では⑥の次にさらにつぎの一段がある。

⑦李陵は何とかして漢朝に帰ろうと思うが、胡王が許さない。漢帝はこれを知らず、李陵は不忠なりとて亡き両親の骸を掘出して討ち、六親を罪した。李陵はこれを聞いて恨深くなつたが、なお故国を恋い、不忠なき旨の書を帝に獻つたので、帝は後悔した。この次に「漢家の蘇武は書を雁の翅につけて旧里へ送り云々」の結びがくる。さて①から⑥は全く出典から遊離して、自由に成長した説話となつてゐるが、⑦は事がらは甚しくちがつてゐるが、李陵悲痛の氣持はさながらに伝えている。この李陵の条は、後の増補本たる源平盛衰記では⑥の次に入り、⑦の次に⑥で結ぶことになつて変化してゐる。また盛衰記では①②が次の如くになつてゐる。

昔漢の武帝の時、胡国の匈奴朝家に隨はざりければ、李陵を大將軍とし、蘇武を副將軍として、胡国の王單于を攻められけり。漢朝より彼の国へは五万里の道なれば、九年に一度行還る程なり。胡国の狄、城を百重に構へたり。李陵勅を重んじ命を輕んじて、先陣に進みて攻戦ふ。狄堪へずして引退く。勝つに乘りて攻め入りつつ、九十九の城を靡しけり。李陵今一つの城に打入りて見るに、兇賊退散して、只胡国の美人のみ有り、官軍乱れ入りければ美人歎きて云く、天命を背き奉るに依て、妾が輩ども、或は身命を亡し、或は行方を知らず、生きても別れ死しても別れぬ、願はくは漢の使我等を助けよと悲み泣く。李陵敵の謀とは知らずして、胡国の女に心を移して遊びける処に、匈奴四方を打囲み、李陵を生捕にしけり。副將軍に控へたる蘇武、生年十六歳、心うしと思つて死生知らずに戦ひけれども、大將破れぬれば殘党全からぬ習ひにて、蘇武も同じく虜らる。

李陵は軍中の遊女を殺したり、後に單于の女と婚するが、これらが遠い木魂となつてか、かかる不思議な説話が形成せられた。ところが同じく増補本で、盛衰記より後出と考えられる長門本・延慶本ではさらに王昭君胡国に嫁する話がこれに織り込まれてくる。長門本を引くと、①の出征の理由として、

昔唐国に漢の武帝と申す帝ましましけり。王昭君といふ后を胡国のえびすに給りたりける事をくやしと思召して、彼の后を奪ひとめんために、李陵といふ者を大將軍として、十万騎を卒してこくくへつかはす。

とあり、李陵の降をきいて一族を殺した。次に蘇子荆に十二万騎を授けて胡国をうたせたがこれもまけて、生捕られ、片足をきられて放たれる。指をくひきり、血で書いた雁書によつて生存を知られ、永律に百万騎を授けて討たせて勝ち、蘇武は王昭君を取返して歸る。李陵は武帝に奉る書を蘇武に托して留まるという今昔をうけた筋になつてゐる。延慶本はこれと同じ筋をさらに光行の蒙求和歌の文や歌をもつて潤色し、最も長い説話にしたてゐる。

以上煩に過ぎるほどに熱田本・天草本・流布本・盛衰記・長門本・延慶本における蘇武事の条を比較したのであるが、結局これらは何れも漢書や文選や蒙求などに直接よらず、わが国に伝承された説話をうけつつ、全く口がたりの説話として自由な変容流動のあとを

示していることが明らかになつた。口誦文芸とは本来こういう性格をもつものである。

ところで平家物語における麗王麗女の物語や宇治川先登の話は史実ではなくして多分に平家作者の創作であるという見方がある。後藤丹治教授はこれに駁しておられるけれども、しかし説話的な誇張は否定せられないし、ちよつとしたケルンのようなものをもとして成長した話であるように思われる。私は康頼卒都婆流しの説話は蘇武雁書の故事にヒントをえた創作であらうと思うのである。私がこゝういふ推定をする一つの理由は宝物集七卷本に前掲のように「鬼界島ニ侍リケル比、未ダ生テ侍ル由ヲ風便ニ母ノ許ヘツカハストテ」として康頼の歌を出し、次に蘇武の故事を出して、宝物集特有の和漢故事列挙の態度を示している。ここには卒都婆流しではなく、便に托して都へ文を送つたこととなつてゐるのである。しかも康頼自筆本と伝えるものにはこの鬼界島の話は削られて唐に渡つた仲麿の話とおきかえられてゐる。おそらく最初の平家の語り手が同じ唱導文学である康頼の宝物集をききおぼえていたか、一見したかして、この七卷本系統本の鬼界島の康頼と胡国の蘇武との境遇の類似に興味をうごかして、雁書に対比して卒都婆流しということを思いついて創りあげたのであらう。こう思つてこの結びの文句を熟視すると、いかにも語り手自らがその秘密をもらしてゐるようである。

#### 源平盛衰記卷八、漢朝の蘇武が事

蘇武は漢家の勅使なり、一紙の筆の跡、雁金雲井を通ひ、康頼は本朝の流人なり、二首の歌の詞は卒都婆浪路を伝へたり。彼は十

#### 延慶本平家物語第一末、漢王の使に蘇武を胡国へ被遣事

蘇武は入胡国ニ繫ニ寶雁於書ニ、而再甄ニ林苑之花ニ、康頼は栖ニ小嶋ニ流ニ蒼波於歌ニ、而遂見ニ故郷之月ニ、彼漢朝胡国、是我国油黄、

九の春秋を送り迎ふ、是は三年の月日を明し暮しけり。上代末代時替り、漢家本朝所異なれども、ためしは同じかりけり、理や彼は天道哀みを垂れ給ひ、是は神明恵を施し給へばなり。

彼は唐国の風儀にて思を述る詩をあやつり、是は本朝の源流にて心を養ふ歌を詠ず、彼は雁の翅の一筆の跡、是は卒都婆の銘の二首の歌、彼は雲路を通ひ、是は浪の上を伝ふ、彼は十九年の春秋を送り迎へ、是は三ヶ年の夢路の眠り覚たり、李陵は胡国に留り、俊寛は小嶋に朽ぬ、上古末代はかはり、境遠遠は隔れとも、思心は一にして哀は同じ哀也。

卒都婆流しが雁書のモチーフの焼直しであることの推定よりさらに一步をすすめて、私には俊寛が鬼界が島にひとり残るという悲劇のモチーフそのものが、李陵の故事にヒントをえた創作ではないかという疑いが強くおこる。もちろん「足摺」の末には船を見送り沖を招く俊寛を唐船を慕つて領布を振つた松浦佐用姫に比し、康頼らの友に別れてひとり島に残された俊寛の悲しみを、海巖山へ放たれた壮里・息里の悲しみに比して、直接李陵と対比してはいない。しかし漢帝の勅使と、赦免の使丹左衛門尉基康、忍苦報われて帰国する蘇武と平判官康頼入道、事志と違つて悲痛の思いをいだきつつ友に別れて胡国に止まる李陵と、赦文に漏れて友のみ帰されて島にたゞひとり残される俊寛の人物配置とシユテイエイションが極めて似ていて、偶然の暗合とのみ思えない。絶海の孤島と朔北の大漠の相違はあるが、沙漠は海洋のように人絶え、孤島は沙漠のように文化から隔絶されていて、まこと「彼は胡国、此は硫黄島」所はかわるが趣はよく似ており、痛憤、かの司馬遷をつき動かして、「太史公自序」を書かしめ、「任少卿に報ずる書」を書かしめたところ

の根源の動力となつた李陵の悲劇性は、全くかたちをかえて、そつくり俊寛の悲劇性として再生しているように思う。延慶本の奥に「李陵は胡国に留り、俊寛は小島に朽ちぬ」と何気なくいつていることは、どうやら、俊寛なる悲劇的人間像の系統を暗示しているように思われる。

拾葉抄卷十七、俊寛の条に、

或云、龍造寺家日記云、肥前国鹿瀬の庄に法勝寺と云禅寺有、開基は俊寛也、成経康頼赦免の時僧都を残し置んも不便なりとてひそかにつれ来り、鹿瀬の庄に住しめけるが爰にて死せりと云々。

肥前国人語云、当国鹿瀬庄法勝寺に俊寛が墓所並に影像ありと云々。

とあり、馬琴の「俊寛考」にも、俊寛於配所不死という説をあげている。私にとつてこれら伝説の真偽は問うところでない、平家物語の最初の作り手が俊寛の悲劇を作つた時には、蘇武に書を与え、置酒して告別した李陵の悲憤の情が、さきに司馬遷をつき動かして史記を書かせたように、彼をつきうごかして、李陵を俊寛なる人間に変

身せしめて李陵の痛憤を痛憤せしめたのであろう。

俊寛僧都の悲痛な琵琶の物語りは、やがて戯曲として上演されるに至る。十四世紀初め延年風流の大風流二十三曲に「蘇武事」が上演されるが、やがて十四世紀末世阿弥によつて謡曲「俊寛」（喜多流では「鬼界島」）が作られる。

玉兔眠る雲母の地、金鶏夜宿す不萌の枝、寒蟬枯木を抱きて、鳴き盡して頭を回らさず、俊寛が身の上に知られて候。

とサシを誂いながら、俊寛面——悲劇的典型的のマスクをつつけ角鳥帽子、茶水衣、腰巻、水桶を手に倉浪として登場するシテの異様な姿。熊野詣での友のために酒を携えて途中まで迎えてきて、山路において酒もりをする。——私はここにおいて漢書の「是に於て李陵置酒して、武を賀し……陵起つて舞歌して曰く……」の美しい文句と共に、はたと敦煌変文の蘇武李陵執別詞の別れの酒もりの場面に思ひあたるのである。

何とて俊寛をば読み落し給ふぞ。

御名はあらばこそ、赦免状の面を御覧候へ。

赦免状をうけとつて、表をみ裏をみて、「さては筆者の誤りか」と低くうめくように言う時、悲劇は高潮に達する。

こは夢か、さても夢ならばさめよさめよとうつつなき。

やがて足摺りに移りゆくくだりはまことに李陵説話を超えた、わが謡曲文芸の創作した典型的な悲劇であらう。

その後近松が五段物の浄瑠璃「平家女護島」の二段目においてこの俊寛の悲劇が再生され、ついで馬琴は八巻の説本「俊寛僧都島物語」において、俊寛を最後に肥前国に亡命させて平家の末路を傍観

せしめておる。近代においては大正初期倉田百三が戯曲「俊寛」を書き上演もなされ、次いで菊地寛が小説「俊寛」を書いた。武者小路にも同名の創作があつたかと思う。俊寛はまことに日本における悲劇的人間像の典型として成長したが、平家における俊寛、謡曲における俊寛形成の背後に李陵説話のもつ悲劇的エネルギーが存左しているように思う、敦煌変文蘇武李陵執別詞の出現が、われらにこのことを一層強く訴えるようである。

(1) 王重民氏「敦煌本王陵変文跋」(華北日報、俗文学周刊第八、第九期)未見。

(2) 周紹良氏「敦煌変文彙録」(初版一九五四・増訂版一九五五)

(3) 那波利貞博士「中晚唐五代の仏教寺院の俗講の座に於ける変文の演出方法に就きて」(甲南大学文学論集第二、昭和三十年)

(4) 梅津次郎氏「変と変文——絵解の絵画史的考察——」(国華、第七六〇号、昭和三十年)

(5) 吉川幸次郎博士「人間詩話——その三十六」(図書、昭和三十年十月号)

(6) 今昔物語集巻十、高祖野項羽始漢代為帝王語第三は主として鴻門の会などをべて、後半闕文となつているが、おそらく王陵にはふれていなかったのでないかと思う。

(7) 高橋貞一氏「平家物語諸本の研究」(昭和十八年)

(8) 本朝文粹巻九、北堂漢書竟宴詩序、紀在昌。

扶桑集巻九、詠史、北堂漢書竟宴、詠史得蘇武並序、紀在昌。

(9) 後藤丹治博士「戦記物語の研究」P.211.(昭和十一年)